築350年の堰、地域の宝を未来に継ぐ

山田堰土地改良区（水土里ネット山田堰）

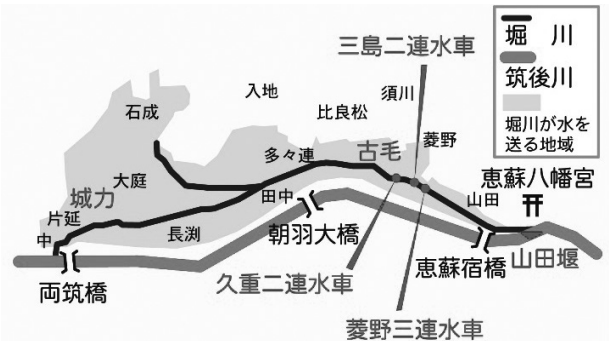
はじめに

九州一の大河、筑後川中流域にある山田堰は、福岡県南東部の朝倉市に位置しています。

江戸時代当初の朝倉地方は、ため池から水を引いた田が散在する程度で干ばつが続くと作物がとれず、何度も飢饉に陥っていました。そこで、下大庭村（旧朝倉町）の庄屋であった古賀百工は、試行錯誤しながらその生涯をかけ、それまであった筑後川から水を引くための人工水路（堀川用水路）を新たにし、水車群をつくり、大小の石を水流に対して斜めに敷き詰めて筑後川の勢いを抑えつつ用水路に水を引く山田堰を1790年に今の姿に完成させました。

この拓かれた農地は、今では筑紫平野の一部を形成し、米や麦、博多万能ねぎなどの農作物を栽培する福岡を代表する穀倉地帯となっています。

現在、この山田堰、堀川水路、水車群の維持管理は、山田堰土地改良区（水土里ネット山田堰）が担っています。



未来を担う地域の子供達への「水の学習」

水源の山々に降り注いだ雨はまず木々の葉に受け止められ、時間をかけて地下に浸透します。地下水は沢となり、多くの沢が集まって川になり、やがて大河になります。

幹川流路延長143㎞の筑後川も源流である阿蘇山麓にある熊本県小国町を水源とする森林（水源林）に降る一滴の雨から始まります。そして大分県、福岡県、佐賀県と4つの県を流れ有明海に注いでいます。その水は、流域に生きる100万人以上の人々を支え、筑後川中流域の朝倉もこの恩恵を受けています。

こうした水循環が朝倉をはじめとする流域を支えているということを地元の小学生に学んでもらおうと、山田堰土地改良区では、水循環を学ぶ体験学習を支援する活動を行っています。これに応えて、朝倉地区の小学校では、4年生の子どもたちが総合学習の授業で、1年をかけて、筑後川や朝倉の農業、水源林の役割などを体系的に学ぶカリキュラムを組んでいます。

筑後川源流を見学する小学生

体験学習では、子ども達を源流の小国町に案内し、小国の人々が林業に励むことにより、木材を生産するだけでなく、洪水を防ぎ、生物多様性を守り、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防止するなど、環境を守る多面的な機能があることを学びます。さらに、水源を涵養し、渇水を緩和する緑のダム機能は、水を安定的に

山田堰で水質調査をする小学生

供給するということも学びます。そして、朝倉の人々がその水を大切に使ってきたことを知ります。

この学習の成果は、「朝倉地域文化祭」で地域住民に披露されています。地域の誇りを懸命に伝える子どもたちの発表を見入る人のなかには、郷土愛を再認識し、感動の涙を流す人も少なくありません。こうして地域が一体となって筑後川の水環境を守ろうという意識を醸成しています。

地域の宝を地域住民総出で守り、愛しむ

朝倉の先人は、一粒でも多くの米を生産するため、懸命に水田を切り拓き、山田堰、堀川用水、水車群からなる農業施設を整備してきました。しかし、若者の農業離れ、営農者の高齢化に加え、現代人の食生活の欧米化、さらに異常気象と私たちをとりまく環境の変化には著しいものがあります。けれども、困難を発展の糧としてきた朝倉は、この変化に応じた作物つくりをしてきました。

一方で、これらの施設群は、食料生産の手段にとどまらず、美しい農村風景の形成、文化の伝承、自然環境の保全など多機能的な効果の発揮が期待されるようになりました。

堀川のクリーンアップ活動

コスモスに彩られた堀川

施設群の一つである「堀川用水路」のクリーンアップを目的として平成20年に発足した「堀川の環境を守る会」は、毎夏、約1,000人の地域住民が参加する環境活動として定着してきました。さらに水路沿いにコスモスや彼岸花を植えて、秋には道行く人の目を和ませ、朝倉の美しい風景をみんなで作り出していくというところにまで発展しました。

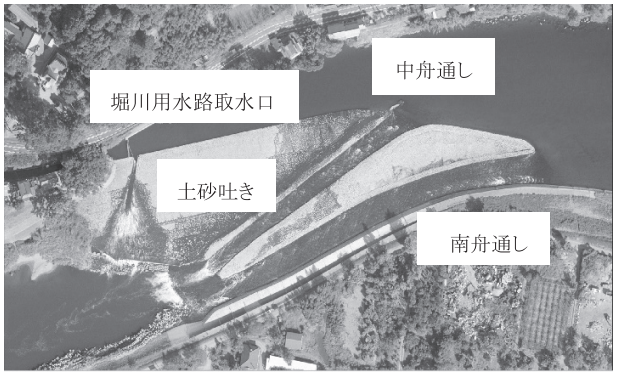
また、三連水車群は、毎年6月になると地域の幼稚園児達と一緒に通水式を行い、8月には幻想的にライトアップをして遠方から帰省した人や夏の涼を求める人たちに安らぎと癒しを提供し、朝倉のシンボルとして観光資源にもなってきました。

三連水車のライトアップ

かつて、筑後川中流域には、川から取水するために袋野堰（1673年）、大石堰（1664年）、山田堰（1663年）、床島堰（1712年）の4つの堰がありましたが、度重なる出水で姿を変え、現存している3つの堰のうち、斜め堰の姿を残しているのは山田堰のみです。また、時代の流れにより木製の三連水車を取り壊す話も持ち上がりましたが、朝倉の風景を守るという当時の管理者のおかげで今でも現存し、日本最古の水車としてその姿をとどめています。このことは、施設群が地域共有の財産として認識されてきたということを示しています。

開発途上国への国際協力

コンピューターも大型機械も測量技術もなかった江戸時代、人々は、経験や知恵、技術を駆使して、地域にある資源だけを用いて地域で生き続けるために山田堰、堀川用水路、水車群を作り上げました。



水量が多く流れも速い暴れ川である筑後川に挑み、堀川用水路に水を引くために築造されたのが山田堰です。全長320メートル、総面積25,370平方メートルの広さを誇り全国で唯一残る「傾斜堰床式石張堰」は、筑後川の水圧と激流に耐える精巧かつ堅牢な構造を持ち、南舟通し、中舟通し、土砂吐きの3つの水路が設けられています。川が運んでくる土砂は、のみを使って人の手だけで掘り抜かれた堀川用水路の入口である切貫水門に流れ込む前に土砂吐きに排出されます。二つの舟通しは当時さかんだった舟運を妨げず、鯰や鮎などの魚が容易に移動できるように生態系にも配慮されています。

この山田堰が築造されて220年後の平成22年、日本から遠く離れた南アジアのアフガニスタンにもうひとつの山田堰が完成しました。福岡市に拠点をもつ国際NGO「ペシャワールの会」がアフガニスタン東部のクナール州をながれるインダス川の支流、クナール川に山田堰をモデルにした石堰を築造し、マルワリード用水路を開削したのです。

平成12年以降のアフガニスタンは、戦乱に加えて旱魃に襲われ、おびただしい人々が飢饉で命を落としていました。もともと医療組織であったこの団体は、治療を続けていく中で、清潔な水と食べ物さえあれば、犠牲は減ると考え、用水路の建設に着手したのです。

しかし、取水技術と資金不足という2つの壁に突き当たり、困難を極めていました。そんな中に見いだされたのが、ペシャワール会現地代表である中村医師の故郷、九州の山田堰でした。

筑後川とクナール川は規模こそ違え、ひとたび雨が降れば暴れ川になるなど似ている点が多くありました。ペシャワール会では、山田堰をモデルに7年の歳月を費やして斜め堰を完成させ、全長25.5kmのマルワリード用水路が開通、広大な荒廃地3,000haが農地となり、農民15万人が生活できるようになったのです。現在は「緑の大地計画」として、「山田堰方式」を隣接地域に拡大し、離村が相次ぎ荒れた村々を回復し、65万の農民、1万6,500haの農地が恩恵を受けています。

平成20年度からは、山田堰などは、国際協力機構（JICA）の研修地となり、旱魃に悩み続ける東南アジアやアフリカの政府関係者や留学生が相次いで視察に訪れるようになりました。

350年前の先人達の知恵は、時代を超えて世界に拡がっているのです。

海外からの視察

新たな使命　復興のシンボルとして

私たちが恵みを受けてきた筑後川の水循環が健全ではなくなってきているのではないかという疑問は朝倉市に総雨量660ミリの雨を降らせ、死者40名、行方不明者2名を出したH29年7月の九州北部豪雨で一層深くなりました。この記録的豪雨では、筑後川を流れる

山田堰は無傷でしたが、農地に水を供給する堀川用水路にはたくさんの流木や土砂が流れ込み、三連水車群には土台から70～80センチほどのたくさんの塵芥が詰まって動かなくなってしまいました。山田堰土地改良区が受益する約650ヘクタールの田畑のうち約130ヘクタールに水がいかなくなり、生育が望めない状況になってしまいました。

しかし、動かなくなった水車はボランティアや農業関係者、地域住民の手によって、たまった土砂を取り除き被災から1ヶ月後には再び動きだして力強く水を送り出し、人々に元気を与えてくれました。その日から三連水車はそれまでの観光のシンボルに加えて、復興のシンボルになりました。水車は何度もの困難を乗り越えた朝倉の先人にならい、朝倉は再び活性化すると勇気づけてくれています。

塵芥がつまって止まった水車

平成30年は、山田堰を今の形にして朝倉の地を豊かにした「堀川の恩人」といわれる庄屋・古賀百工翁が生誕してから300年という節目の年になります。これを機に、彼の偉業を今一度ひもとき、自然と共生する知恵や技術を学び直し、財産を後世に残していくとともに、国内外に情報発信をしていくことが私たちの新たな役目になりました。災害を体験した子ども達は、今までの「水の学習」に加えた新たな想いで進んだ学習をしてくれると思います。災害のパターンがアフガニスタンと似てきているという中村医師は、「故郷（ふるさと）の回復」、これが国境を超える共通のスローガンであると話されています。

この5年間で2度も水害を体験した私たちは、地元朝倉高等学校の生徒が唄う山田堰や三連水車を題材にした歌に私たちの宝が確実に引き継がれていっていることを確信しました。これからも地域活性化のために尽力していきます。

「わたしのふるさと～あさくら」

作詞：羽野　洋之
（旧朝倉町出身　朝倉高等学校卒）

いかだ流し　ホタル狩り　メダカ
どじょう　追いかけて
裸足で駆けた帰り路　夕陽にかがやく　筑後川
わがふるさとは遠きにありて　今もなお
歴史を刻み未来へ続く　わたしのふるさと　あさくら

緑の野に競い咲く　実り多きふるさとの
ほほをかすめる風の音に　遠い昔がよみがえる
わがふるさとの田畑を満たす　三連の
水車は唄う未来への歌　わたしのふるさと　あさくら

歴史つづる　先人の語りつむぐ　伝説に
はるか昔をたどりゆき　心は還る　あの頃へ
わがふるさとは永遠なれと　祈りつつ
いつも心に未来を抱く　わたしのふるさとあさくら

朝倉の農村風景

山田堰土地改良区（水土里ネット山田堰）